

グレースチャペル礼拝週報

グレースチャペルの礼拝ようこそ！
今日は、聖餐式と誕生祝いがあります。
主の恵み満ち溢れる礼拝でありますように！

詩篇朗読：詩篇 23 篇

聖書箇所：ヨハネ 14：16～17

説教題：「主イエスの約束一別の弁護者」

*ヨハネ16：16～17

14:16 わたしは父にお願いしよう。父は別の弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてくださる。

14:17 この方は、真理の霊である。世は、この霊を見ようとも知ろうともしないので、受け入れることができない。しかし、あなたがたはこの霊を知っている。この霊があなたがたと共におり、これからも、あなたがたの内にいるからである。

*コリントー 2：10～11

2:10 わたしたちには、神が“霊”によってそのことを明らかに示してくださいました。“霊”は一切のことを、神の深みさえも究めます。

2:11 人の内にある霊以外に、いったいだれが、人のことを知るでしょうか。同じように、神の霊以外に神のことを知る者はいません。

*コリントー 12：11

12:11 これらすべてのことは、同じ唯一の“霊”の働きであって、“霊”は望むままに、それを一人一人に分け与えてくださるのです。

*使徒言行録 16：6～7

16:6 さて、彼らはアジア州で御言葉を語ることが聖霊から禁じられたので、フリギア・ガラテヤ地方を通って行った。

16:7 ミシア地方の近くまで行き、ビティニア州に入ろうとしたが、イエスの霊がそれを許

さなかった。

*ローマ 5：5

5:5 希望はわたしたちを欺くことがありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。

*エフェソ 4：30

4:30 神の聖霊を悲しませてはいけません。あなたがたは、聖霊により、贖いの日に対して保証されているのです。

*イザヤ 63：10

63:10 しかし、彼らは背き、主の聖なる霊を苦しめた。主はひるがえって敵となり、戦いを挑まれた。

*エフェソ 4：25～32

4:25 だから、偽りを捨て、それぞれ隣人に対して真実を語りなさい。わたしたちは、互いに体の一部なのです。

4:26 怒ることがあっても、罪を犯してはなりません。日が暮れるまで怒ったままではいけません。

4:27 悪魔にすきを与えてはなりません。

4:28 盗みを働いていた者は、今からは盗んではいけません。むしろ、労苦して自分の手で正当な収入を得、困っている人々に分け与えるようにしなさい。

4:29 悪い言葉を一切口にしてはなりません。ただ、聞く人に恵みが与えられるように、その人を造り上げるのに役立つ言葉を、必要に応じて語りなさい。

4:30 神の聖霊を悲しませてはいけません。あなたがたは、聖霊により、贖いの日に対して保証されているのです。

4:31 無慈悲、憤り、怒り、わめき、そしりなどすべてを、一切の悪意と一緒に捨てなさい。

4:32 互いに親切にし、憐れみの心で接し、神

がキリストによってあなたがたを赦してください
さったように、赦し合いなさい。

GraceChapel ニュース

*神様と共に、恵みと喜び溢れるゴールデン・ウィークをお過ごしください！

ーメッセージ・アウトラインー

序. 最後の晩餐の席での約束

ある時からイエス様は、ご自分がまもなく十字架にかけられて死ぬことを弟子たちにはっきりと教え始められました。弟子たちは、その意味や目的を明確に理解することはできずに、動揺しました。そんな彼らに対して、主イエス様が最期の晩餐の席で言われた言葉が今日の御言葉です。

(1) 「別の弁護者」である聖霊

イエス様は、動揺する弟子たちに、「別の弁護者」を与えてくださると約束されました。これは、ヨハネによる福音書の中でも、要となる教えと言ってもよいでしょう。主イエス様は、教会の活動を指導し、教え、力を与えるために、弟子たちに聖霊をお与えになったのです。それゆえ、私たちは、この聖霊について熟知する必要があります。

(2) 聖霊は人格を持っておられる

A. 聖霊についての間違った教え

聖霊を単なる物質や何かのエネルギーと考えるなら、聖霊と個人的で親しい関係を持つことはできません。

B. 人格であるための特性

- ① 知性 *コリントー 2 : 10~11
- ② 意志 *コリントー 12 : 11
- ③ 感情 *ローマ 5 : 5b、エフェソ 4 : 30、イザヤ 63 : 10

(3) 聖霊と共に生きる

私たちが、聖霊を認め、聖霊との交わりを深め、聖霊と共に歩み、聖霊の働きかけに応答していくにつれて、おそらく栄光に満ちた超自然的な神様の働きを体験し始めることでしょう。しかし、私たちの信仰の土台は、体験ではなく聖書の御言葉です。また、私たちが真に目指すべきもの、それは神様ご自身であり、神様をさらに深く知り、さらに深く交わること、それが目標であるべきです。